

我樂多玩具

岡本綺堂

青空文庫

私は玩具おもちゃが好すきです、幾歳いくつになつても稚氣ちぎを脱せいしない故せいかも知れませんが、今でも玩具屋の前を真直まっすぐには通り切れません、ともかくも立停ひとめつて一目ひとめずらりと見渡さなければ気が済まない位です。しかしかの清水晴風さんなどのように、秩序的にそれを研究しようなどと思つたことは一度もありません。ただぼんやりと眺めていればいいんです。玩具に向う時はいつもの小児こどもの心です。むずかしい理窟ぜいなどを考えたくありません。随つて歴史的の古い玩具や、色々の新案を加えた贅ぜいな玩具などは、私としてはさのみ懐しいものではありません。何処どこの店の隅にも転がつていような一山百ひやくもん文式の我樂多玩具、それが私には甚ひどく嬉しいんです。

私の少年時代の玩具といえば、春は紙鳶たこ、これにも菅糸すがいとで揚あげる奴やつ、風ふうがありましたが、今は廃すたれました。それから獅子、それから黄螺ばい。夏は水鉄砲と水出し、取分けて蛙の水出しなどは甚ひどく行われたものでした。秋は独樂こま、鉄銅かねどうの独樂にはなかなか高価たかいのがあつて、その頃でも十五錢二十錢ぐらいのは珍らしくありませんでした。冬は鳶とび口ぐちや纏まと、これはやはり火事から縁を引いたものでしょう。四季を通じて行われたものは仮面めんです。今でもないことはありませんが、何処の玩具屋にも色々の面を売っていました。仮面めん

には張子と土と木彫の三種あつて、張子は一錢、土製は二錢八厘、木彫は五錢と決つていました。が、木彫はなかなか精巧に出来ていて、槃若はんにやの仮面めんなどは凄いい位でした。私たちは狐きつねや外道げどうの仮面めんをかぶつて往來をうろうろしていたものです。そのほかには武器に関する玩具が多く、弓、長刀ながなた、刀、鉄砲、兜、軍配ぐんぱい団扇うちわのたぐいが勢力を占めていました。私は九歳ここのつの時に浅草の仲見世で諏訪法性すわほうしょうの兜を買ってもらいましたが、鍔しころの毛は白い麻で作られて、私がそれをかぶると背後うしろに垂れた長い毛は地面に引摺ひきずる位で、外へ出ると犬が啣くわえるので困りました。兜の鉢はすべて張子でした。概して玩具に、鉄葉ブリキを用いることなく、すべて張子か土か木ですから、玩具の毀れ易やすいこと不思議でした。槍や刀も木で作られていますから、少し打合うとすぐに折れます。竹で作ったのは下等品かとうひんとしてあまり好まれません。小さい者の玩具としては、犬張子、木兎みみずく、達摩だるま、鳩のたぐい、一々数え切れません、いずれも張子でした。

方々の縁日には玩具店おもちゃやが沢山出ていました。廉やすいのは扱取りよりど百文、高いのは二錢八厘。なぜこの八厘という端錢よせんを附けるのか知りませんが、二錢五厘や三錢というのは決してありませんでした。天保錢てんぽうせんがまだ通用していた故ゆえかも知れません。うす暗いカンテラの灯の前に立つて、その縁日玩具をうろうろと獺あさつていた少年時代を思い出すと、涙ぐましい

ほどに懐しく思われます。

私の玩具道楽、しかも我楽多玩具に興味を有^もっているのは、少年時代の昔を懐しむ心、それがどうも根本になっているようです。私が玩具屋の前に立つた時、先^まず眼につくのは旧式の我楽多玩具で、何だか昔の友に出逢ったような心持になります。實用新案の螺旋^{ねじ}仕掛^{かけ}などには何の懐しみを有^もつことが出来ません。随^もつて小児にまでも頭脳^{あたま}が古いと侮^{あなど}られますが、どうもこれは趣味の問題ですから已^やむを得ません。旧式の張子の仮面^{めん}などを手に把^とつてじつと眺^とめていると、ひどく若々しい心持になると、何とはなしに悲しくなる時と、その折々に困^よつて気分^{きぶん}の相違^{さいてい}がありますけれども、いずれにしても、その玩具を通して少年時代の夢を忍^{しの}ぶことは、私に取^とつては嬉しいことです、堪^たらないほどに懐しいことです。大人でないと笑^{わら}われても、私はこの年になるまで、我楽多玩具と別^{わか}れを告^つげることには出来ません。この頃は少しばかり人形^{にんぎよう}を貰^{もら}い集^あめていますけれど、これは道楽の余業で、ほんとうの道楽は一山百文式の我楽多玩具にあること勿^な論^{ろん}です。しかし時代の変遷^{へんせん}で、その我楽多もだんだんに減^へつて来るので困^こります。大師^{だいし}の達摩^{だるま}、雜司^{ぞうし}ヶ谷^やの薄^{すすき}の木兎^{みみずく}、亀^かめ、戸^{めいど}の浮人^{うきにんぎよう}形^{かたち}、柴又^{しばゑ}の括^くり猿^{さる}のたぐい、皆^{みな}な私の見逃^{みど}されたいものです。買^かつて来てどうするといふ訳^{わけ}のものではありませんが、見るとどうも手が出^でしたくなります。電車の

中などでも薄の木兎などを担^{かつ}いでいる人を見ると、何だか懐しくなって、声をかけてみたいように思うこともあります。

こういう意味ですから、私の道楽はその後何年経^たっても進歩するはずはありません。根が研究的から出発しているのではありませんから、いわゆる「通」になるべきはずはありません。しかし我樂多玩具に対する私の趣味は、年を取るに随ってますます深くなるだろうと思っています。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「新小説」

1919（大正8）年1月号

初出：「新小説」

1919（大正8）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

我楽多玩具

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>